

新しい詩の声 2021 (第5回)・作品

〔最優秀賞〕

故永しほる

咬合

歴史に呼ばれて
絶望を見つめながら
これは、悲しみではない
つたない過去を
省みるために
手渡されている
千古の
人々の
それぞれに
献身していた影の
深いところから
御廟であるかのように
涼しい石を置く

人間が撤去された
美化されて
かたちを思った
最後のページで
ひとつの死が終わった
古くからの書物
現実を強化するために
夥しい言葉を
嘔み潰して
血で濡れた
沈黙をゆるして
死者たちへ
扉を用意する
過剰に繁茂した

碑銘は意味を失い
蝸牛の歯に
コンクリートの
壁が咀嚼されている
数年後の
私たちを想像して
そこには共感がなく
あるいはそれ以外になく
勝利をすることで
私たちは
ゲームを続け
無邪気に
欲望をする
はてしない
中庭に佇立して
みずみずしい系が
これから克服する
次の死の
短い百年も
ここから始まる

善人のために
剪定され、飾られている
二〇一号室は
私のいない
誰かではある
物語で語り続ける
ありふれた
前線を死守した
本心に敗北して
肉体から最も遠く
あれは、伝聞であると
人間の代わりに
無人のまま
重たくなっていく
現実がないことで
人間の塔も
ありあまる未完のための
牧人のように
あどけない夢を見る

〈優秀賞〉

瑠芙菜

初恋

大きな、大きな木の下にぼくはいて、世界を持って
余しているよ

きみはやはり、きてくれなかった

葉は、ぼくの涙を隠すには、いくぶんささやかで、
花は、ひと一人のために咲くには、どうしたって
うつくしすぎる

だけどぼくは、音もなくスマホを叩いて、きみを
赦すだろう

きみはやはり、こなくてよかった

この星は、ほんとうのことが、ひどく少ない

あの太陽はきつと、安心長持の「田」電球だし、

この風はきつと、さつき電気屋で見た、最新のや
つだね、わかってる

白い月はたぶんリアルだけど、今にも雲に呑み込

まれてしまいうさぎだ、ふわふわの白いうさぎが、
まだ、もたもたと餅をついているというのに
たすけなきゃ！

そうだ、たすけられたら、うちで飼おうよ、きみ
はなんて名前をつけるかな、ミミちゃんなんて、
かわいいかもしれないよ、人参をあげようね
きみはやり、ここにいるべきだった

そんなことを、あれこれぼくと、喋るべきだった
んだ

スマホは沈黙して、気味が悪い、ぼくのメランコ
リイをいっばい、詰め込んだかのように、黒い、
カカオ分が高いだけのチョコレートみたいだ

いつそ、そうならよかった、そうしたら、これを
使ってガトーショコラを焼いておくれよ、食後に
はきみと不細工なワルツなど踊るつもりで

そして

そして目を開けて、ぼくが温度をやさしく取り返
したとき、この髪は、春の風にそよぎ、この頬は、
あたたかい陽の光に色づくのです、

あるいはそれは、きみへの恋慕のために。

〔優秀賞〕

大西 久代

夏草の中の小さな花

住宅地からは

取り残された畑地が見はらせる

丈高く草々が生い茂る一角

永く人の手が入らない荒れ地に

時の経過が 幻として浮かびあがる

柔らかな土の青々とした賑わいがあった

ナスやキュウリ ズッキーニやオクラ

瑞々しい苗が手際よく植えられ

快活な声に包まれ 水はひかりを反射し

実りゆく夢が口々に語られた

誰の手からも遠い 見捨てられた地

隙を切り裂いて オレンジの色彩が

ひなげしの咲き姿を告げる

薄い花びらのうえを

風が慰めのように過ぎてゆく

細い茎に支えられ 夏草の勢いに抗するように

しなやかに咲いている

忘れられた土の奥底で

小さな命はひっそりとうごめく

除染作業が終わり

漂う荒れ地に足を浸し

刈り込みの作業ははじまる

記憶に残る豊穡な実りをよりどころに

棟深く湧きあがる熱

整地した土壌に

一株の苗を埋め込んだ男の心に

ひなげしの花は

ひっそり揺れていただろう

傷みの中 体を貫いて生れ出るものへ

小さなものが その視線を支えている

〈優秀賞〉

オノ カオル

夜に朝

息子はわたしの過去。

父はわたしの未来。

息子は立ち上がり、両の足で歩む。

かつてわたしがそうしたように。

父は倒れ、車椅子を廻す。

いつかわたしがそうするように。

あまりにも柔らかな息子の太腿に触れ、

硬く冷たく曲がったままの父の左手を感じる。

食事をよくこぼす息子を見つめ、

涙をこぼしやすくなった父を案じる。

まだ話せない息子の声に耳を傾け、

言葉が少なくなった父の胸の内を思う。

ようやく生えてきた息子の前歯に噛まれ、

痩せこけた父の脚を見たときの痛みが走る。

息子を抱いて昇りゆく太陽の匂いを嗅ぎ、

父を抱いて闇を照らす月の香りを思い出す。

わたしが育てていく息子よ。

わたしを育ててくれた父よ。

生きてゆく息子よ、死んでゆく父よ。

かつてのわたしと、いつかのわたしよ。

すべての終わりのそのあとで、

父は私の過去になる。

息子はわたしの未来になる。

繰り返すのだ。すべての夜に、朝が来るように。